

「主がお入り用なのです」－マタイによる福音書講解説教 84－

イザヤ書 第62章 10節～12節  
マタイによる福音書 第21章 1節～11節

説教 岡村 恒 牧師

「主がお入り用なのです」(3節)。この言葉を聞いた人は、ろばと子ろばの手綱を手放しました。本当なら役に立つはずのない子ろばだったのです。

人々の目に留まらないものを主イエスは呼び出されました。多くの方がこの子ろばに自分自身を重ねて2000年、聖書を読んできました。

「ホサナ。ホサナ。」と響く言葉。「今、お救いください。」という言葉を入り口を叫ぶ中、主イエスはエルサレムの門を通過して入って来られました。実に不思議な入城の方法でした。子ろばに乗っていたということを除けば、王の凱旋パレードの姿でした。群衆は、私たちの救いの時が来たという喜びの中にあっただけです。

主イエスは預言どおりの姿で、エルサレムに入られたのです。しかし、人々は自分が何を叫んでいるのか理解していません。彼らは、目に見える日常を政治的な面で見ると主イエスが変わると信じ、「ホサナ。ホサナ。」と叫んでいたのです。ガリラヤのナザレ村からやってきた主イエス。この主イエスは特別な力を持つ預言者だと人々は思っていたのでした。けれども、ろばの子に乗って来た弱々しい姿にどんなに人々は落胆したことでしょう。

ですが、その一方で、藁にもすがる思いで救われることを願っていたのでしょう。自分の服や棕櫚の葉を道に敷き、棕櫚の葉を持ち歓喜の声をもって迎えたのです。まだ、主が何もしてられないのに。

このことはあらかじめ聖書に記されていたとおりでした。けれども、この場にいた人々のほとんどが、主イエスがどのようなお方なのかを分かっていたりなかったのです。

ろばは平和を意味します。闘いとは無関係なろばに乗る柔和なお方。主イエス。闘いではなく、平和を。そこに柔和が示されるのです。聖なる目的の為に準備された、誰も乗ったことのない、あらかじめ用意されていたろばの子に乗られたのです。

預言もまた、あらかじめ語られていました。すべては神のご計画とおりであったと、聖書は語ります。これは歴史的な事実です。ご自分を神のご用に用いていただく為に。人々が何を叫んでいるか分からない時に、主イエスだけがどこに向かって歩んでいるか、進んでいるかを分

かっておられました。

群衆は何を求め、叫んでいるのか本当は分からずにいるのです。主の十字架。主の死に行く様の中に、何が起きているのか分からずにいるのです。この群衆の中に「私」もいるのです。群衆こそが、「私たち」の姿そのものです。

主イエスは、「もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」(マタイによる福音書 26章39節)と、血の滴りをもって祈られました。神と共におられた御子が、神に裁かれ、神に見捨てられるのです。主イエスの心の内には、深い悲しみと痛みがありました。

しかし、人々は自分への幸いや祝福を求めていましたから、主のこの姿に失望します。本当に必要なものが何であるのか分かっていないのです。神を呪い、神が自分の道具であると思込み、勝手に期待をし、失望するのです。しかし、主イエスは、この人々の為に祈り、とりなして下さいました。更には、私たちが受けるはずの裁きを受けてくださり、陰府(よみ)にまで降って下さいました。主のとりなしの祈りは、陰府にまで広げられました。神の赦しの力はどこまでも及ぶのです。

かつて神はその民を、エジプトの地からモーセによって解放し、導き出してくださいました。奴隷の地からの解放を記念する過越の祭に、主イエスはエルサレムの町で、十字架につけられて死に、絶望の夜を過ぎ越させてくださったのです。私たちが死と絶望の中で滅び去らないように、救いを実現してくださったのです。

日曜日は、主の復活を、私たちに与えられた命を確認する日です。このお方に私たちは解き放たれました。主が復活され、聖霊がくださった後、人々は喜びと力に満たされてエルサレムから旅立つことができるようにされたのです。

私たちに与えられた、この一週間も神に仕えることができる日々が与えられています。神の子として救い出された一日一日、聖霊は私たちに生かしてくださいます。そして、主イエスを再びお迎えする時が私たちに用意されています。主イエスは、あの十字架で、赦しと救いを完成してくださったのです。

(記 説教要約奉仕者)